

## イエスのことば 第40回

イエスは彼らに言われた。「パリサイ人たちやサドカイ人たちのパン種に、くれぐれも用心しなさい。」 (マタイ 16:6)

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

□文脈の確認

1. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余。
2. 紀元 29 年の春、過越の祭りの頃から、同年の秋、仮庵の祭りまでの、約 6 か月間において、イエスは、異邦人の地域へ 4 回、旅行した。異邦人地域への 4 回の旅行は、**退避（リトリート）と休息の時**であったと同時に、**弟子たちの訓練**を目的とした。
3. 異邦人地域へのリトリート第 1 回：ガリラヤ地方を離れて、ガリラヤ湖の北東地域の町ベツサイダの近くへ。「五千人の給食」と呼ばれる奇跡を通しての訓練
4. 「五千人の給食」の奇跡の直後、嵐の中での訓練
  - (1) 給食を受けた群衆（ガリラヤ地方のユダヤ人たち）がイエスを王に擁立しようとするが、イエスはその動きを拒み、弟子たちだけを舟に乗せて出発させた（日没直前）。
  - (2) 弟子たちの舟は、日没後から夜明け前まで、湖上で嵐に見舞われる。イエスは湖上を歩いて舟に乗る。弟子たちはイエスの神性を認めた。
5. 舟は、ガリラヤ湖の北西岸、ユダヤ人の地域に到着。そして宣教拠点のカペナウムに戻ってきたときに、給食を受けた群衆が追いかけてきたので、「いのちのパン」の教え。
6. 引き続き、カペナウムでの出来事。監視団が、「汚れを洗いよめる」ことに関するミシュナ（言い伝え）に照らして、イエスは違反している、と非難した。これに対してイエスは、神がミシュナをどのように見ておられるのか、そして、人を汚すものは食べ物ではなく、人の内側にある罪の性質であると教えられた。
7. 異邦人地域へのリトリート第 2 回。ツロとシドンの地方へ。ツロでは、異邦人の女性がイエスへの信仰を表明し、幼い娘から悪霊を追い出していただいた。
8. 前回は、リトリート第 3 回。デカポリス地方。イエスのもとに集まった異邦人たちに対して、「四千人の給食の奇跡」が起きた。
9. 今回は、ガリラヤ湖東岸から舟に乗って、対岸のユダヤ人地域、マガダン地方に着いたときの出来事。監視団がやって来て、イエスに天からのしるしを要求した。

マガダンでの拒否

□リトリート3回目デカポリス地方への旅を終えて、マガダン地方へ

(マタイ 15 : 39~16 : 1)

それから、イエスは群衆を解散させて舟に乗り、マガダン地方に行かれた。

パリサイ人たちやサドカイ人たちが、イエスを試そうと近づいて来て、天からのしるしを見せてほしいと求めた。

(マルコ 8 : 10b~11)

それから、イエスは彼らを解散させ、すぐに弟子たちとともに舟に乗り、ダルマヌク地方に行かれた。すると、パリサイ人たちがやって来てイエスと議論を始めた。彼らは天からのしるしを求め、イエスを試みようとしたのである。

1. ガリラヤ湖の東、デカポリス地方での四千人の給食の奇跡の後、イエスは群衆を解散させて舟に乗り、ガリラヤ湖の西側、マガダン地方（別称 ダルマヌク地方）へ着いた。ここは、ユダヤ人の地域である。
2. すぐに、監視団がやって来て、イエスに「天からのしるし」を見せてほしいと要求した。具体的には、天からマナを降らせるしるしである。申命記には「モーセのような預言者」というメシア預言がある。モーセのときには、天からマナが降って、民はそれを食べて荒野で養われた。その奇跡の再現を要求したのである。
3. イエスは、先のリトリート第1回では五千人のユダヤ人、リトリート第3回では四千人の異邦人に、わずか数個のパンを裂いて、全員に食べさせ、皆が満腹して、なお余りのパンをかごに集める、という奇跡を行った。しかし、そのような奇跡では、「天からのしるし」にはならない、というのである。
4. 「イエスを試みようとした」とあるが、イエスがメシアであるかどうか確認したいということではない。「できるはずはない。できないとなれば、やはりメシアではないと宣言しよう」という方針であった。これは、指導者層による、あらためてのメシア拒否であった。

□イエスの応答、そして再び向こう岸へ（異邦人地域へ）

(マタイ 16 : 2~4)

イエスは彼らに答えられた。「夕方になると、あなたがたは『夕焼けだから晴れる』と言い、朝には『朝焼けでどんよりしているから、今日は荒れ模様だ』と言います。空模様を見分けることを知っていながら、時のしるしを見分けることはできないのですか。

悪い、姦淫の時代はしるしを求めます。しかし、ヨナのしるしのほかには、しるしは与え

られません。」こうしてイエスは彼らを残して去っていかれた。

(マルコ 8 : 12~13)

イエスは、心の中で深くため息をついて、こう言われた。「この時代はなぜ、しるしを求めるのか。まことにあなたがたに言います。今の時代には、どんなしるしも与えられません。」イエスは彼らから離れ、再び舟に乗って向こう岸へ行かれた。

□舟の中での弟子たちの議論

(マルコ 8 : 14~16)

弟子たちは、パンを持って来るのを忘れ、一つのパンのほかは、舟の中に持ち合わせがなかった。

そのとき、イエスは彼らに命じられた。「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種には、くれぐれも気をつけなさい。」

すると弟子たちは、自分たちがパンを持っていないことについて、互いに議論し始めた。

(マタイ 16 : 5~7)

さて、向こう岸に渡ったとき、弟子たちはパンを持って来るのを忘れてしまっていた。

イエスは彼らに言われた。「パリサイ人たちやサドカイ人たちのパン種に、くれぐれも用心しなさい。」

すると彼らは「私たちがパンを持って来なかったからだ」と言って、自分たちの間で議論を始めた。

1. イエスが急遽、また舟に乗って向こう岸に渡ったので、同行する弟子たちは食糧となるパンを持って来るのを忘れた。舟の中にはパンが一つあるだけであった。
2. 弟子たちがそれに気づいたところに、イエスが、「パリサイ人、サドカイ人、そしてヘロデのパン種に注意せよ」と命じられた。
3. 弟子たちは、パンを忘れたことを叱られたのだと受け取った。弟子たちが何を議論したかは記されていないが、パンを忘れたのはだれの責任か、これからは誰がパンの調達をするのか、といった内容だったと推測される。

□舟の中での教え（指導者層のメシア拒否に関する警告）

（マタイ 16 : 8）

イエスはそれに気がついて言われた。「信仰の薄い人たち。パンがないからだなどと、なぜ論じ合っているのですか。」

（マルコ 8 : 17～21）

イエスはそれに気がついて言われた。「なぜ、パンを持っていないことについて議論しているのですか。まだ分からないのですか、悟らないのですか。心を頑なにしているのですか。目があっても見ないのですか。耳があっても聞かないのですか。あなたがたは覚えていないのですか。わたしが五千人のために五つのパンを裂いたとき、パン切れを集めて、いくつのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「十二です。」

「四千人のために七つのパンを裂いたときは、パン切れを集めて、いくつのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「七つです。」

イエスは言われた。「まだ悟らないのですか。」

（マタイ 16 : 11～12）

「わたしが言ったのはパンのことではないと、どうして分からないのですか。パリサイ人とサドカイ人たちのパン種に用心しなさい。」

そのとき彼らは、用心するようにとイエスが言われたのはパン種ではなく、パリサイ人たちやサドカイ人たちの教えであることを悟った。

### ■ 3つのパン種

1. 福音書の中で、「パン種」は罪、特に、偽りの教理を教える罪を象徴する。
2. パリサイ人、サドカイ人、そしてヘロデ党は、イエスについて、それぞれ、偽りの情報を流していた。
  - (1) パリサイ派・・・「イエスは悪霊に憑かれている」
  - (2) サドカイ派（悪霊や天使の存在を否定する。復活も信じない）・・・「イエスは神殿祭儀を破壊しようとしている」
  - (3) ヘロデ党・・・「イエスは、ヘロデ王家とそれを通してのローマ帝国の支配とに反対している」、これも嘘である。後のことになるが、イエスはヘロデ党の者たちが同席する対話の中で、「カエサルのはカエサルに、神のものは神に返しなさい」（マタ 22 : 21、マルコ 12 : 17、ルカ 20 : 25）、カエサルすなわちローマ皇帝に服すべき事柄では服するように、と教えた。